

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

北海道のあしたの森を育てる  
コープ未来の森づくり基金  
コープ未来の森づくり基金は、  
組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

コープ未来の森づくり基金レポート

# モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。  
森で育とう。  
森を、育てよう。

vol.30  
Nov. 2025

## 編集後記

「森」という空間はどんな形に変容するのだろう。以前から森を人の集まる場として活用し、使う人を見てきましたが、わたしたちが普段から森づくりの場として見慣れている「Fの森」でそういう場をつくるとしたらどうなるんだろう。実はそうした想像は今まで全くできていませんでした。だから、今回「Fの森フェスティバル」が開催されて、どんな風景が生まれるのか、不安半分、期待半分だったのです。

でも森(というか「自然」と言ってしまった方がよいのでしょうか)の力は偉大でした。来た人たちが思い思いに楽しんでいる姿は、森という場が持つ懐の広さを存分に教えてくれたのです。

これからわたしたちが森に向き合う上で、もっと森に対してもっと色々な期待や価値を付託してもよいのではないか、そう思った秋でした。

モリイク vol.30 2025年11月発行  
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。



人と森をつなぐ  
森づくりの風景

森に関わり続けるために  
森を楽しむ



# 森は

小寺卓矢

森は いつも  
しずかに ききます

— どこから きましたか  
— どこまで きましたか





森は きいています

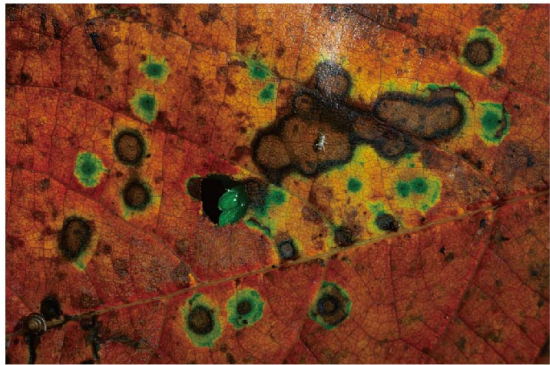
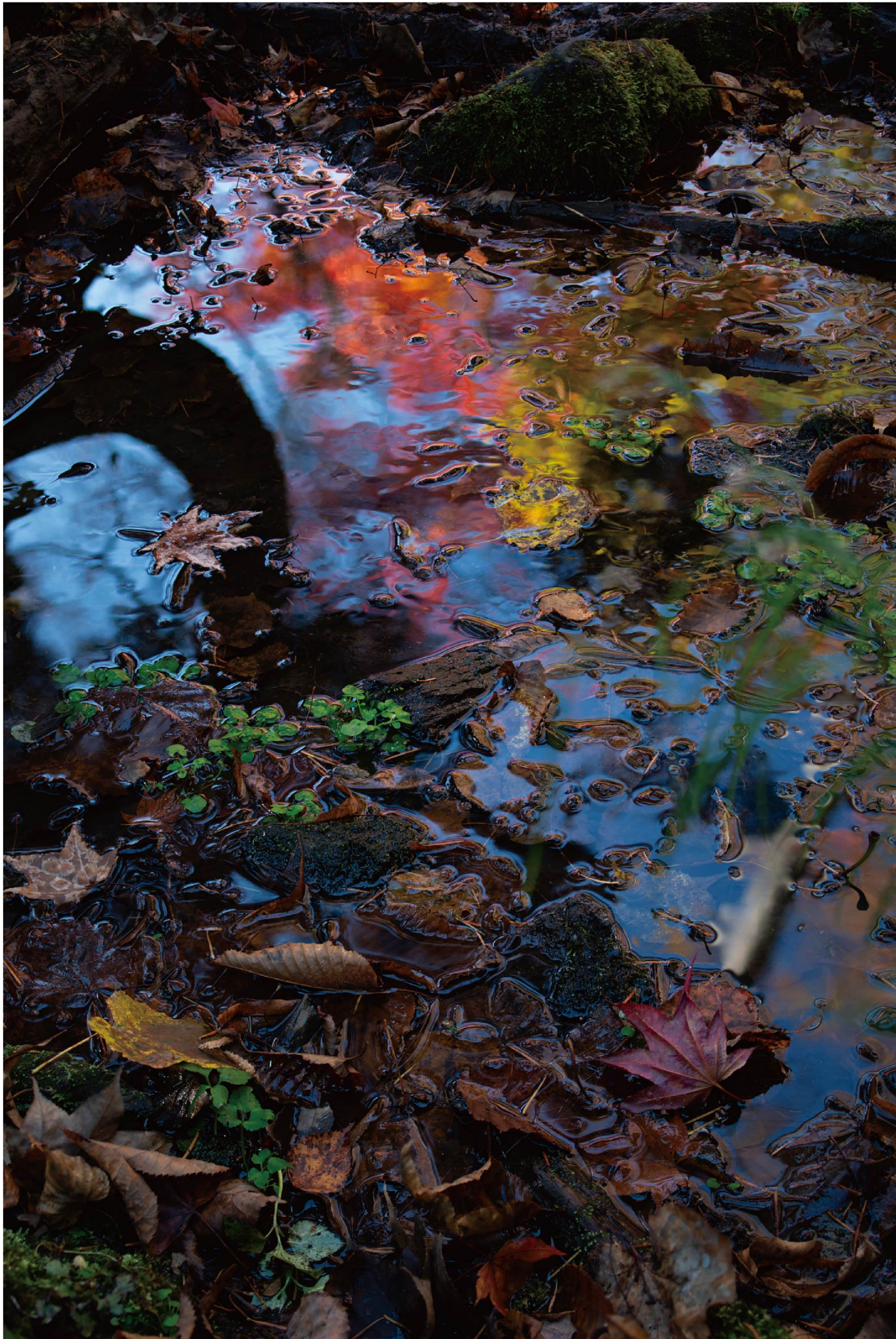
— どこから はじめましょう

— なにを はじめましょう

(— どうして はじまったのですか)







— なにを おえますか  
— なにが おえますか  
  
— そして また  
どこから はじめましょう

森は きいています  
いつも しずかに  
だから 私も つづけましょう  
いつも いつまでも

photo/text 小寺 卓矢

1971年神奈川県出身。写真家、写真絵本作家。北海道十勝に在住。「森に息づくいのちの繋がり」をテーマに、北海道や各地の森林風景を撮影している。学校や公共図書館での写真絵本体験プロジェクト、音楽家や芸術家とのコラボレーション公演等を数多く行っている。2010年から北海道教育庁特別非常勤講師をつとめる。主な著作に、写真絵本『森のいのち』、『だって春だもん』、『いっしょだよ』、『いろいろはっぱ』、『さくらら (升井 純子と共著)』(以上アリス館)、『わたしたちの「撮る教室」』(石川 晋ほか共著／学事出版) などウェブサイト <https://photokodera.com>







# モリ★イク

## \* contents \*

- \*02 フォトストーリー  
森は
- \*09 コラム 森づくりのトレンド  
未来のための市民による森づくり
- \*10 あそびにこう！ 森の中へ  
どんぐりはかせの森あそび研究所
- \*12 特集 Fの森フェスティバル  
Fの森 新しい風景
- \*18 木育essay  
海を渡ったプリンセスたち ～北限のブナ林
- \*19 もっと樹のことを語ろう  
大きな木の小さな物語
- \*20 ほっかいどう 森のイキモノSOS  
島県(シマフクロウ)をまもるということは
- \*22 コープ未来の森づくり基金報告  
活動報告など



全国の様々な森づくり団体の展開を見ると、植樹や間伐などの作業を入口として、様々な活動が生まれてきていることに気づきます。

植樹や間伐などの作業に関わることでまず生まれて来るのはその森への愛着です。自分が作業したことで森がどう変わっていくかという関心を持ち、引き続きその森に関わっていききたいと思い、そこからその森への愛着が育っていくことが多いようです。森づくりの作業は、大変なことも多いですが、作業の成果が目に見えて達成感を得られます。一方で生き物相手なので、思い通りに森が育っていくとは限らず、思い通りに行っても次の作業が必要になって来るので、森に関わり続けようとするのだと思います。

愛着が深まってくると、もっとその森に関わりたいと思うようになります。個別的な作業を行うだけではなく、森づくりの計画を立て日常的に森の管理全体に関わろうとする取り組みを始めるところも多く、道外の自治体所有の里山などでは、森づくり団体が指定管理者になって管理や利活用を仕切るようになっていところもあります。

また、作業だけではなく、森そのものを楽しもうとする動きも出てきます。例えば、森を子どもたちの遊び場として活用し、遊びながら学び、森づくりに関われるような取り組みが行われています。

また、作業の副産物で出てきた木を利用して炭焼きや木工などを楽しむなど、それぞれの団体が様々な工夫をしながら楽しみ方を探っています。

森づくりに関わっていると、森に関する知識も増え、また森づくりの楽しさをますます感じ、たくさんの人に森のことを伝えたい、楽しみを分かち合いたいと思うようになります。自分たちがつくってきた森を知ってもらい、また楽しんでもらう機会を設けながら、森づくりの仲間の輪を広げている団体もたくさんあります。森と人とのつながりをつくり、深めていくことに、大きな役割を果たしています。

そのほか、地域との関わりを深めていく団体もあります。活動対象とする森は様々な課題を抱える過疎地域にあることも多く、森づくり活動をする中でそうした課題を認識し、集落機能が維持困難となったコミュニティを支援したり、森の活用を通して少しでも地域活性化に貢献しようとしている団体もあります。

森づくりに取り組むことを通して、経験と知識が豊かになり、また様々な課題を感じるようになり、そこに新たな活動の可能性が開けてきます。あすもりも、森という場を媒介にして、人と人のつながり、森と人とのつながりを広げ、深めるための模索が続けられればと思います。★

## Starting Column 森づくりのトレンド

### あした 未来のための 市民による 森づくり



柿澤 宏昭  
(かきざわ ひろあき)

北海道大学 名誉教授  
コープ未来の森づくり基金 運営委員長  
1959年神奈川県横浜市生まれ。  
北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。  
持続的な森林管理を多様な人々の協働で支える仕組みづくりを、ポスト資本主義を模索しつつ考え続けていこうと思います。  
主な著書として『日本の森林管理政策の展開』、『保持林業』など。



# どんぐりはかせの 森あそび研究所

その⑥ 秋遊び「マツボックリ」

秋の森にはたくさん木の实があるよ。今回はマツボックリに注目！  
どんぐりはかせたちは、なんとマツボックリサイズになっちゃった！

## マツボックリいろいろ！

マツボックリは、松の木の実です。種類によって形も違うよ。見つけてみよう！

### ドイツトウヒ

20cmくらいの細長く大きなマツボックリをつけるよ。

### エゾマツ・アカエゾマツ

マツの中でもトウヒという仲間。マツボックリは4～5cm。うろこ（鱗片）が薄くてペラペラなのが特徴。



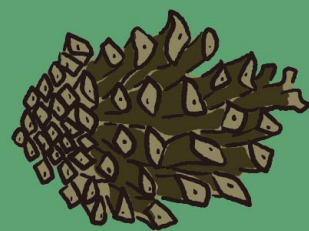
### カラマツ

秋に葉が黄色になり、落葉する。小さいバラのような形のかわいいマツボックリを付けるよ。



### アカマツ・クロマツ・ヨーロッパクロマツ

松の木といえばこの木。葉は2本一束です。丸くてしっかりしたマツボックリが付く。ヨーロッパクロマツのマツボックリは大きくてきれいな形。



### チョウセンゴヨウ

15cmくらいで、ふとっちょな巨大マツボックリ。中のタネは食べられる。



## マツボックリのエビフライ!?

森の中にエビフライのような形のもが落ちてることがあるよ。これはリスがマツボックリのうろこを剥がして中のタネを食べた跡。先っぽだけうろこが残ってエビフライの形になるんだ。かわいいエビフライ探してみてね。



※エゾマツやドイツトウヒのマツボックリがよく見られる。



はなちゃん

おいしいなー

エゾリス

### トドマツ

北海道の森に生えているトドマツのマツボックリは木の上でバラバラになって落ちてくる。だからマツボックリは拾えないんだ。

### ゴヨウマツ

細長い葉が5本一束なので五葉松。手触りが柔らかい。マツボックリは小さめ。



他にも、公園や庭に植えられるマツにはいろんな種類があるよ

## マツボックリ観察

落ちる前のマツボックリは閉じていて中にタネが入っているよ。持って帰って乾かすと開いて、羽のついたタネがたくさん出てくる。高いところからタネを落とすと、クルクル回ってプロペラみたい。風に乗って遠くへ飛んでゆくんだね。



## あそぼう！

### クリスマス工作編

クリスマスリースの飾りには、欠かせないマツボックリ！

### リース

- ① 蔓をわっかにして土台をつくる
- ② マツボックリや木の実を木工用ボンドやホットボンドでくっつけて飾る

土台の蔓を手に入れるのが大変だったり、子どもと一緒に簡単に作るなら、段ボールをドーナツ形に切り抜いて代用しよう。

あると便利！

ホットボンド  
ホームセンターなどで買えます。  
△やけどに注意して使おう

### 木の実のクラフト

マツボックリや木の枝、ドングリなどの木の実を集めて、ホットボンド（グルーガン）でくっつけて動物や人形など、好きなものを作ってみよう。



### 小さなクリスマスツリーを作ってみよう。 マツボックリのクリスマスツリー

- ① 形のきれいなマツボックリを見つけてます。  
ヨーロッパクロマツのマツボックリがオススメ！
- ② 良く乾かすと大きく開きます。
- ③ 土台の上にボンドなどでつけます。
- ④ ビーズや、綿、スパンコールなど自由につけましょう。
- ⑤ オリジナルミニツリー完成♪



手のひらサイズ！

### 知りたい北海道の木 100

身近な街路樹・庭木・公園樹（亜璃西社）

佐藤 孝夫 著

★北海道の身近な樹木を厳選して紹介。入門編の樹木図鑑です。

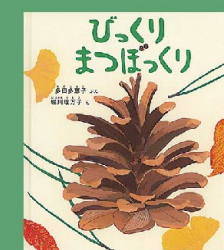
よもう！

### びっくりまつぼっくり

（福音館書店）

多田 多恵子 ぶん 堀川 理万子 え

★マツボックリを拾って、試してみたくなる絵本です。





# Fの森 新しい風景

2025年9月23日

「Fの森」の森づくりがはじまってから15年。  
この日は今までずっと続けてきたような、  
森づくりの作業とそのために訪れた人々ではなく、  
楽しそうに思い思いに「Fの森」という  
場と時間を過ごす人々と、  
その賑やかな笑い声にあふれ返ったのです。

## いつもと違う 「Fの森」を楽しもう

今までずっと森づくりを続けていた「Fの森」  
ですがこの日はヨガや体操をしたり、ネ  
イチャーゲームを体験したり、お絵描きや森の  
質問コーナーやパズルや絵本を楽しんだり、は  
たまたのんびりお弁当を食べたりコーヒーを  
じっくり味わったりと、森づくりの影がほとん  
どない、いつもと違う雰囲気が広がりました。

2025年は、あすもりを運営するコープさっ  
ぽろが60周年を迎えた年です。さまざまな催  
しが企画されましたが、これに合わせてあすも  
りでもいつもと違う特別なイベントをしよう  
じゃないか、という話になりました。折しも「F  
の森」では森づくり活動も10年以上となり、植  
樹のスペースもなくなって育樹や育林へとス  
テップを進めたタイミングでもあります。

たくさんの人と今の「Fの森」を分かち合い、  
楽しむということがあっていいのではない  
か、とのことから、あすもり初の森でお祭りを  
して皆さんに来てもらおう、ということになっ  
たのです。

当日はとても気持ちの良い秋晴れ。暖かくて  
さわやかな秋の空の下、200人以上の参加者が  
集まりました。子どもから大人まで、「Fの森」  
に初めて来たという人から、何度も足を運んで  
森づくりに関わってくれた人まで、たくさん  
の人たちです。それぞれが準備されたアクティ  
ビティに参加したり、のんびりと過ごしたり。笑  
顔で走り回る子どもや、コーヒーを片手に談笑  
する大人や、ゆったりと流れる森の時間を自分  
なりの好きな方法で満喫しているようでした。  
最後には記念植樹を行い、未来の自分や地球へ  
のメッセージをタイムカプセルに託して「Fの  
森」を後にしました。

そこには確かに、今までの「Fの森」とは違う  
風景が広がったのです。それが、9月23日の  
秋分の日に特別に開催された「Fの森フェス  
ティバル」だったのです。



# と遊ぼう Fの森 フェスティバルへ ようこそ！

「Fの森」全体が会場になって、  
いろんなテントやキッチンカーが出店し、  
賑やかな森の一日になりました。

## キッチンカー

ドリンクをのんびり楽しんだり、  
ランチのおかずを買ったり。今回は3台のキッチンカーが出店してくれて、「Fの森」で初めての森のカフェタイムを演出してくれました。



## 森の運動場

青空の下で体を動かそう！森  
ヨガや森の健美操で気持ちよく  
体を動かし、深呼吸して日頃の  
疲れをリフレッシュしました。



## 森の音楽隊

森で音楽も楽しみたい！今回は  
ウクレレ奏者に来ていただいて、  
みんなで歌を歌ったり、ウクレレ  
の演奏を聞いたりして森に鳴り  
響く音楽を楽しみました。



## 森の迷路

背の高さを超えるほど大きく  
育ったオオアワダチソウの野  
原に道をつけて巨大迷路を作  
りました。みんな迷子になら  
ずに出てこられたかな？



## 森のゲーム

隠された人工物を探すネー  
チャーゲーム「カモフラージュ」  
をみんなで楽しみました。森づくり  
道具のおもちゃや衣装もあって、  
林業家になりきって写真を撮影したり  
もしましたよ！

## 森のガイドウォーク

「Fの森」の達人たちが森  
を案内します。どんな森  
づくりをしてきたか、ど  
んな人たちがどんな思い  
で作ってきたか、それか  
ら、森のひみつなどなど。  
誰でも歩けるコースから  
丘を越えヤブの坂道を歩  
く上級者向けまで、3つ  
のコースを設定しました。  
それぞれに見どころ  
のある森歩きを楽しみま  
した。



## 森の学校

森や動物に詳しい先生がいろ  
んなことを教えてくれます。特にヒ  
グマの毛皮や頭骨は迫力満点！  
みんな興味津々でした。  
また、お絵描きコーナーでは好き  
な生き物の絵を描いたり色を  
塗ったりして大賑わい！



## ボランティアのみなさん

今回のイベントのために大学生や森づくり団体など、多くのお手伝いをいただきました。会場の整備や運営の補助、来場者の対応など、大活躍でした。



高校時代に山岳部で、樹を覚えたりしていたことから大学でも森林研究会に入りました。今回はガイドの補佐などを受け持ちます。ガイドが話した情報を伝えるほか、自分が知っている樹の面白い特徴や森の面白さをちょい足して森の楽しさを参加してくれた人に伝えられたらと思います。

北大森林研究会 川越 広平さん



もともとアウトドアが好きで、森林研究会が面白いことをやっているなと思って入りました。森のことや林業のことは知れば知るほど面白いです。今回は、森に来てくれた人に、子どもだけじゃなくて大人も、森は入りにくいところじゃなくて、楽しいところだという印象を持ってほしいです。

北大森林研究会 橋本 結さん

## Fの森 新しい視点①

## 楽しんでこそ、持続可能

「Fの森」は単に木を植える場所ではなく、その土地を知り、将来の森林をデザインしながら、森に親しむ市民が増えていく、「森づくり・人づくり」の実験場です。

いろんな試行錯誤をしてきましたが、2012年、全く植栽をしない年をつくり、ワークショップメンバーを募って現地を歩き回ったのが大きかったと思います。地図読みやヤブ漕ぎに苦労しながら、起伏のあるFゾーンを歩き、植生の違いや沢の流れ、土の湿り具合、生き物の存在を足の裏で確かめました。そうした肌感覚から、牧草地を「北海道本来の森にもどそう」という目標に向かい、市民が多彩なイメージやアイデアを出して、森の未来像を毎年デザインしてきたわけです。

10年余りが経ち、木々が少し大きくなり、自生の若木も増えてきました。植樹会が育樹会に変わり、いずれ「育林」になるかなと期待しています。

「Fの森フェスティバル」では、背の高いオオアワダチソウの群落に迷路が作られ、丘や湿地を歩くガイドウォーク、さまざまな体験ブースも設けられました。13年前のワークショップ活動が、より幅広い形で再現されたような気がします。青空の下、300人もの市民が思い思いに歩き回り、多彩な森の楽しみを経験してくれたことは、子どもたちの遊び方にもいい影響があるような気がします。

また、多くのコープさっぽろの職員が事前研修の段階から参加し、「Fの森」のコンセプトや将来像を共有できたのも、この活動を根付かせるのに大きな意味がありました。形だけのメセナではなく、自分たち自身も楽しみ、育てていく活動こそ、持続的な共感と支持につながると思います。

私は「森のがっこう」というテントを担当しました。イラストレーターの新岡薫さんと子どもたちが木の輪切りや紙にいろんな動物の絵を描き、その横でヒグマの毛皮や頭骨の説明をしました。本物の毛の手触り、骨の硬さ、意外に面長で大きな鼻や発達した奥歯。頭骨からは、植物食をメインとするヒグマの生活が見えてきます。コワイ・カワイイだけじゃない、森に生きるお隣さんとしてのヒグマの姿。「共存」といっても、そんなに仲良くするわけではない。距離をとり、互いに避けあうくらいの間柄。安全は大事だが、安心をはいけない、森のリスクマネジメントも大切な感覚だと思います。

クマに関する質問攻めの合間に、オオイタドリを切ってイタドリ笛を沢山作りしました。あちこちで柔らかな笛の音がするのはいいものです。

森づくり実験場としてのFの森は、今のところ、人も木も順調です。道内各地のコープの森を始め、日本の「森づくり」の新しいスタイルの一つになるといいなと思っています。



やまもと まさ  
山本 牧

NPO 法人もりねっと北海道  
森づくりコーディネーター  
専門は森林動物学（ヒグマ）。北海道新聞記者を経て森ガイド兼木こり。NPO 法人もりねっと北海道代表。旭川市在住。2012年からFの森の森づくりコーディネーターとして関わっている。





## 新しい、森と人との つながりを生む

コープ未来の森づくり基金は2008年の洞爺湖サミットを契機として、森づくりを通して地球温暖化を止めるためのアクションを広げていこう、と設立されたものです。その活動は主に森づくりをする団体の支援だったり、森づくりそのものだったりします。

でも、もうひとつ大切な使命として考えていたのが、人と森をつなぐ、ということ。人間社会と自然とのつながりが希薄となってしまった現代社会で、そのことを思い出し、意識することで森や自然を守り、北海道の美しい自然環境を次世代に手渡したい。それがあすもりのひとつのミッションなのです。

コープさっぽろ60周年をきっかけに企画されたこの「森と遊ぶ！ Fの森フェスティバル」ではたくさんの人たちが「Fの森」にやってきました。みんな森のガイドに聞き入っては、木の葉の手触りや香りに感動したり、じっと森の音に耳を澄ませたり。または森を舞台に歌を歌ったりヨガで森の空気をいっぱい吸い込んでみたり。またはお弁当やキッチンカーで買ったコーヒーを楽しんだり、思い思いにのんびり過ごしたり、本当に来てくれた皆さんが好きなように、楽しそうに森でのひとときを過ごしていました。「森の空気がとても気持ちがいい」「こんな場所

があるのを知らなかったのでまた来たい」「森づくりをしてみたい」など、初めて訪れた人もうれしそうに話してくれました。

こうした様子は本当に印象的で、確かに「Fの森」には私たちが今まで見たことがなかった風景が生まれたのでした。

## 新しい、試み

「Fの森フェスティバル」はあすもりにとって新しい試みでした。それまでは森づくりを中心に、植樹や草取り、枝打ちなどの作業スタイルだったのですが、10年以上の活動期間を経て、コロナ禍も影響し、参加するメンバーも固定化したり少なくなったりしていました。

たくさんの人に森に来てもらう・森と人をつなげるという目標はなかなか達成に近づけなかったのです。そこで、どうしたらもっと人が来る森になるだろう、と試行錯誤が続く中、新しく関わる人たちの協力も得ながら、森を楽しむことを目的に、フェスを開催してみようということになったのです。

## そして、新しい課題

「Fの森」は森づくりの場です。植樹をはじめから10年以上の時間が経過し、正直なところまだまだ森とはいえないような場所や、植えた樹がほとんど枯れてしまった場所もあり、森づくりとしてやらなければならない

ことは満載です。また、地球温暖化による気候変動は止まることを知らず、2025年は特別に暑く、長い夏となりました。こうしたことから、あすもりも森づくりから力を抜くべきではないのかもしれない。

でも今回のように、多くの人が訪れ、さまざまな形で自分なりに森を楽しんでくれたことは「Fの森」の新しい可能性を開きました。

訪れた多くの人々、そのうちの何人かは「Fの森」の森づくりに関心を寄せる人もいます。現場を訪れて楽しむことから始まる人と森とのつながり、そこからの森づくり。そうした流れのはじまりを、今回はしっかりと見ることができたのではないかと思います。

一方で、森づくりは100年の仕事です。今回のような大きなイベントが毎年できるわけではありません。この経験をもとに、「Fの森」にどうやって継続的に人に来てもらうのか、その人たちと森づくりをどうつなげていくのか、市民とともにどんな「森づくり」の形を育てていくのか、森づくりを進めるための課題の洗い出しにもなったようにも感じます。

新しい試みであったこの「Fの森フェスティバル」で森にあふれた笑顔。それは本当に素晴らしい「森の風景」でした。この経験をもとに「Fの森」がどんな道を歩むのか、皆さんにもこの先もぜひ見守り、関わっていただきたいと思います。🌲

## Fの森 新しい視点 ②

## 人が森と 関わりつづける ということ

5年ほど前から、コープの森づくりに関わり始めました。Fの森の植樹会などのイベント、植樹祭前後の保育活動、職員さんの実地研修などを業務とさせていただきながら徐々に、あすもりの活動や森づくりのこれまでの歩みを学ばせてもらっています。

20年弱の間、同じ森をフィールドに活動してきたいつものメンバーが、いつもそこに集まっている。各地にある森林公園のような、利用や管理などの関わりが常に続く森は多くあるけれど、F森ほど多様な人々がその森づくりの歩みに「参加している」となると、その数は全国的にも少なくなるでしょう。僕はそこに森づくりの本質を感じています。

あすもりの活動は無立木地への植樹をメインに行い、北海道全域でその本数は10万本を超える。一般的現代社会からすると、企業の地域環境に対する取り組みとしてはその数字だけでも説得力のあるものに見えます。ある日、Fの森での職員実地研修の場で「10万本という数字で森づくりを語ってはならないと思う」と担当の鈴木さんは言いました。何故そこにその木を植えるのか？ 育ち、森になるまでどんなプロセスがあり、どのように人や自然環境が、そしてコープさっぽろ自身が関わり、地域や仲間と協働してゆくか？ を考えていこう、という想いを込めた一言であったと感じ、とても印象的でした。

Fの森に新たなトレイルを作ってみました。比較的大きな木々が生えている場所を突っ切るコースです。急斜面だったり沢地だったりと人間の活動が難しく、「この地域のもともとの森の雰囲気」がわずかに残る斜面の上の方に、ひときわ大きなシラカンバの木が鎮座しています。樹齢は大体6～70年、ウダイカンバと交配して一見、見分けがつかないような個性的な見た目をしているのがとても面白く、周りには、その子どもたちと思われる小さなシラカンバたちがポツポツと生えている。カンバなどの小さなタネを風で飛ばすタイプの木は、生涯に1億とか、2億個という膨大な数のそれを産み落とすといわれています。にも関

わらず、見渡す限り大きなシラカンバはその一本だけ。家に帰って考えてみました。シラカンバの一般的な寿命は7～80年で、種の飛翔距離は100mほど。「ああ、あの大きなカバは70年に一度の2億分の1の奇跡だ」と。森や生態系はそのような小さな奇跡の壮大な積み重なりの上にあるのです。

Fの森は大きな木がないから森じゃないかも……。植えて育った木が少ないし、Fの「森」と呼ぶのはまだまだ先の話かも……。など、現地活動の現場で、参加者さん、職員さんたちからそんな声が聞こえてくることがあります。ちょっと大袈裟に比べてみます。70年で2億分の1本の「自然の確率」に対して我々は、たったの20年、10万本で100%の確率を狙ってFの森に植樹活動をしていることになります。ちょっと無理な話のようにも感じてしまえますね。僕も半分そう思いますが、半分は全く逆の考えです。冒頭に述べた通り、同じ森に多様なキャラクターを持つ人間たちが一定期間、関わり続け、その活動の記録が文字・画像・動画という形で「モリイク」などの紙媒体やデジタルデータにも蓄積されていて、今もお更新を続けている。そして、Fの森のフィールドにも明確な活動の跡＝みんなの記憶が、途切れることなく存在し続け、その中で植えられた木々や、種子から出てきた天然児たちも、過酷な環境の中で腕きながらもゆっくりと、しかし確かに大きくなってきている。混ざり合い、競い合い、蓄積する「存在と記録と記憶たち」。それらは即ち、森の遷移（成長の移り変わり）そのものといえるのではないのでしょうか？

私たち人間ほど多様な記憶や記録をその場に残すことができ、長い時間を経過した後、それらをまた読み取ることができる動物は地球にはほかにいません。Fの森の自然環境にとって、私たちの「存在と関わり」もまた、ひとつの奇跡。その出会いの確率は2億分の1よりも更に低いはず。僕はこの先も、みなさんと一緒にFの「森」に関わりながら、そこに積み重なってゆく小さな奇跡の証人のひとりとなっていくでしょう。木こりとして、森の中の特等席で。

あだち しげあき outwoods  
足立 成亮 株式会社やまのかいしゃ

フリーランスの木こりとして道内各地で環境共存型の林業を提案・実践している。「森に人を呼ぶ・街に森を持ってゆく」独自のスタイルで人と森を結ぶ。2021年から「Fの森」の管理や企画に携わっている。







## 海を渡ったプリンセスたち ～北限のブナ林

今年の夏、黒松内町のブナセンターを訪れた折に、同行した友人の男性がブナの木で作られた美しい手回しオルガンを見つけた。やあ、なつかしいな。と言った彼はその楽器をじっと見ている。東日本大震災の折、被災地まで運ばれ、演奏されるのを聞いたそう。災害ボランティアとして長く当地に関わった彼はしみじみとして、「泣いている人もいたなあ」と、やさしい顔で話してくれた。その彼と並んで聞いた音は、柔らかで温かい響きだった。ブナの林を風が抜ける音が、ブナの名前の由来だという説がある。それに似ているのだろうか。

黒松内町には北海道遺産に指定された北限のブナ林がある。明治以降の開拓による伐採からまぬがれて奇跡的に生き残った貴重な遺産である。中でも合わせて天然記念物に指定された歌才のブナ林を見たくて、ブナセンターに勤める友人に案内を乞うた。

ブナは森の女王と呼び鳴らされるほどの美しい木だ。すらりとしてまっすぐなオリーブグリーンの幹には独特の白い斑。枝張り良く、葉も丸みを帯びて愛らしく、柔らかな薄緑の色が日に透けてやさしい。

少し登りますよ。親子ほども年の違う案内人の彼女が気遣ってくれる中、山道に行く。最初は他の広葉樹やトマツの人工林の中にぼつぼつと見えていたブナの木が、森の奥に入り込むにしたがってがぜん優勢になってくる。樹齢200年はあろうかという大木があちこちに存在感を見せ、原生林のダイナミックな光景に目を奪われる。優勢の訳はブナの木の戦略にある。春、ブナの木はほかの落葉広葉樹よりも10日から20日早く葉を出す。そのたった20日足らずのタイムラグが、ブナの木の一人勝ちの勝因なのだ。まだ、他の木が眠っている間に急いで太陽の光を受け、光合成に

より栄養を蓄える。増え方も独特だ。水の大好きなブナの木はタネもやっぱり水が好き。秋に落ちた種は水分たっぷりの雪の中で芽を出す。そして雪解けを待って根を張る。ブナの幼木は陰樹なのでほかの木の下、日の差さないところでも大丈夫なのだ。5年から7年くらいの周期でブナの実が豊作になる。おいしくて栄養豊富な実を動物たちに食べられても、その時を待てばいいのだ。

ところで北限のブナはどうやって海を渡ったのだろう。『昔、世界がもっと寒かった頃、ブナは北海道には生えていませんでした。温かい時代が来て、ブナのタネは海の向こうで暮らしたい、そこで仲間をいっぱい増やしたい。と思いました。そこで海を渡れる強い翼を持つ鳥につかまって海を渡りました。ほかにも縄文人が船で運んだと考えるのがロマンチックでいいな。という人もいます。』

ブナは北の地が、寒冷で乾燥した氷期と、生育に適した温暖で湿潤な間氷期が訪れる度に北上と南下を繰り返してきたのではないかとわれている。

雪に抱かれて芽吹いた今年の幼樹が見てみたい。私が言うところ案内人の彼女は、春にはいっぱいあったんですけどね。と、あちこち探して、ようやくブナの大木の下に小さな薄緑色の双葉を広げる幼樹を見つけてくれた。枝を伸ばしそびえ立つ母樹が女王なら、その子はプリンセスだ。かつて一人ぼっちで海を渡ったブナのタネも、こんなふうに愛らしい双葉を広げたのだろう。

ありましたよ、ほら…。やさしく双葉にふれながら私を見上げた彼女の笑顔が、小さなプリンセスの、眩しいほどのいのちの耀きに重なって、胸が熱くなった。❖

text/ 齊藤 香里  
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

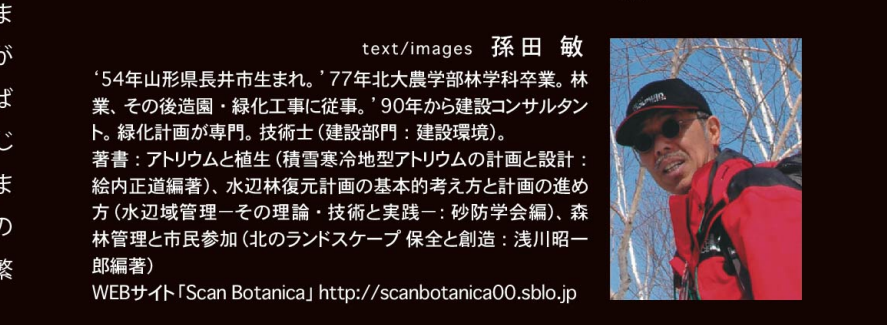
# 大きな木の 小さな物語

## ㊤ ニセアカシア

ニセアカシアは樹高が25mほどにもなる北米原産の落葉広葉樹です。五千円札の肖像に描かれている津田梅子（津田塾大の創設者）の父、津田仙が1873（明治6）年開催のウィーン万博に列席した際にニセアカシアの種子を持ち帰り、その後苗木として育てられるようになりました。1878（明治11）年ころには東京の日比谷公園に植えられています。札幌には1881（明治14）年に東京青山開拓使試験場から苗が持ち込まれ、1885（明治18）年札幌駅前通りに街路樹として植栽されました。

ニセアカシアは成長が速く、材質もよく、植栽地が痩せていてもよく育ち、萌芽力も旺盛（根萌芽といって伸びた根の先からも芽を出す）、さらに蜜源としても良質ということで、日本各地で街路樹だけではなくはげ山の緑化などにも多用されました。一方で、繁殖力が旺盛なので森林を皆伐したところや耕作を放棄したところには「ニセアカシア林」を形成することが多く、広がりの速度が速いことから自生する動植物への影響が懸念され、環境省の「要注意外来生物」に指定されています。

札幌では6月中旬から下旬に満開の時期を迎えます。房状に垂れ下がった花の下で甘い香りを感じたこともあるのではないのでしょうか。その花の基は葉の基と一緒に冬芽の中に形成されます。「混芽」と呼びます。ところがこの冬芽、ほかの木々とは異なり表には現れません。「隠芽」といってトゲとトゲの間に隠れています。切断すると、エメラルドグリーンの芽が見えます。そしてある時期になると芽が外側に膨らみ葉が開き、2週間ほど遅れて花が咲きます。マメ科なので「蝶形花」という形の花です。やがてエンドウ豆とそっくりな豆果（または莢果）と呼ばれる果実をつけます。熟して乾燥すると豆果はねじれ、割れるとまるでプロペラの羽根のようになります。きっと中のタネだけでは遠くに散布できないので、鞘ごと風に吹かれて遠くまで飛ばそうという繁殖戦略なのかもしれません。❖



text/images 孫田 敏  
‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門・建設環境）。著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理—その理論・技術と実践—：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著）WEBサイト「Scan Botanica」http://scanbotanica00.sblo.jp





ぜつ めつ き ぐ し ゅ  
**絶滅危惧種**と呼ばれる、急激に数が減って地球上からいなくなってしまうかもしれない、環境省や北海道のレッドリスト※に入っているイキモノがいます。

道東にすんでいる**シマフクロウ**について、**彼らを守り、その生息地を広げていくためにわたしたちに何ができるのかを考えてみよう。**

※ 絶滅の心配がある生き物をまとめた一覧表

**シマフクロウ（島梟）** *Bubo blakistoni* 環境省レッドリスト 絶滅危惧 IA 類（CR）

かつては北海道内に広く生息し、アイヌには「コタンコロカムイ（村を守る神）」と呼ばれ、親しまれ、あがめられていました。現在は道東地域を中心に100つがいほどが確認されるのみ。北海道で最も危機的状況にあるイキモノのひとつです。

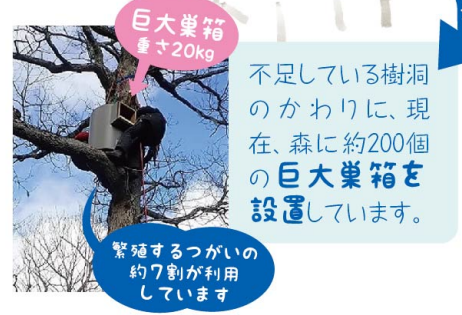
**なぜ数が減ったの？  
どうやって守っているの？**



**SOS!!** **森が減り、大きな樹が減った！**

シマフクロウは幹の太さが1m以上もある大きな木に穴（樹洞）を巣として利用しますが、開発などで大きな木が減ってしまい、彼らの子育ては難しくなっています。

また、シマフクロウはなわばり意識が強いいため、1つがいあたりに**広い生息地が必要**です。



巨大巣箱 重さ20kg

繁殖するつがいの約7割が利用しています

不足している樹洞のかわりに、現在、森に約200個の**巨大巣箱**を設置しています。

**SOS!!** **事故で命を落とすことも！**

森から川を目指して道路や橋を横切るときや、道にいるカエルなどをねらうときの**交通事故、送電線や電柱に止まろうとして感電する、シカ対策ネットや漁網に絡まる**など、悲しい事故死も見られます。



**対策**

道路や橋の上に柵をつけたり、電信柱に**止まり木**を設置したり、**危険な漁網の撤去**をして事故を防止。ケガの治療やリハビリも行われています。



**対策**

一度つがいになると長〜く連れ歩きます

繁殖期の3〜6月はオスとメスの鳴き交われが増える

**SOS!!** **人が子育てのジャマをする！**

近くで見たい！ 撮影したい！ ネットに載せたい！ と、近づいたり、カメラを向けることが、繁殖行動や子育てのジャマに。シマフクロウが1回の子育てで育てるヒナは1〜2羽。しかも、毎年うまく育てられるわけではなく、**数年に1回しか成功しないことがほとんどです**。そのため、1羽のヒナが無事に成長することがとても重要です。シマフクロウの暮らしをどうか邪魔しないようお願いします。



**対策**

生息地ではカメラマンなどの立ち入りを防ぐための**見回り**もしています。実物を見たい人は動物園で！ 環境省や環境団体のホームページや動物園などで、生態や保護活動、**正しいマナー**を学ぶことができます。



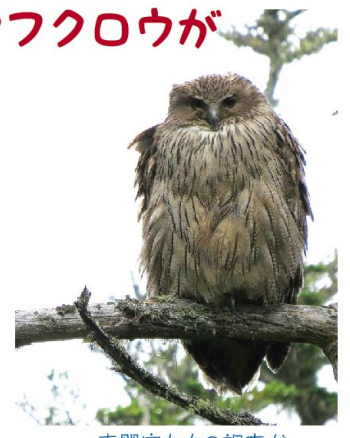
北海道の自然が支える命の大きな傘の上に、シマフクロウの命があります。シマフクロウの生息地は生物多様性が高いという調査結果があり、自然が健全で豊かであることの証明なのです。シマフクロウを守るとは、森、川、湖、海の豊かさを守ること、多様な命を守ること、北海道の環境を守ることにつながります。

**想像してみよう、もしもシマフクロウが自分の町にやってきたら**

ある日、自分の住む家のそばの森にシマフクロウが姿を現したら。それはとても素敵なこと。あなたを取り巻く自然に魅力を感じて立ち寄ってくれたのかもしれない。

考えてみよう。あなたの町には、シマフクロウが生息できる豊かな環境があるかな？ 安心して子育てできる静かな環境はあるかな？ 事故の心配はないかな？ 住民は「近づかないマナー」を守ってくれるかな？

そして、シマフクロウの新しいふるさとになるには、どんな保全活動が必要かな？



専門家たちの調査が保全活動につながっています (写真：外山雅大)

**環境省HP シマフクロウと共に暮らす**  
<https://policies.env.go.jp/hokkaido/withfishowl/>

シマフクロウがどんな鳥なのかを紹介し、保全して共に生きることの大切さをわかりやすく解説したサイトです。



**新岡薫／エトブン社、モリノコ商会**

北海道のイキモノをテーマに絵と文を描く、札幌出身のイラストレーター。森と湿地、動物園、水族館、博物館の散策を好む。知床旅の朝、川沿いの雪の上に飛び立つ羽の跡が。ひよとして？夜の彼らを想像するだけで楽しかったです。  
<https://etobunsha.com>

根室市歴史と自然の資料館 <https://x.gd/M5xj5> と やま まさ ひろ 学芸員(自然) **外山 雅大さん** お話を聞いた人

東京都出身。北海道の東の端っこの小さな資料館で自然史担当の学芸員をしています。オオコノハズクからシマフクロウまで、北海道にいるフクロウたちの調査研究、保全活動がライフワーク。趣味はコーヒーの焙煎。夜の森でフクロウたちが囁くのを待ちながらコーヒーを飲むのが至福の時間です。

**宮本尚／モリノコ商会**

森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。環境保全やヒグマ対策の仕事しながら、歌をつくって演奏するシンガーソングライター。宮本尚Song-Gardenというバンドでライブハウスなどで演奏しています。  
<https://naoeaster.wordpress.com>



Event Report 森づくりを語ろう



# 2025 年度 森づくり会

## 今年は植樹せずに「育樹」をしました

よく晴れて気持ちのよい青空の中、「Fの森」の森づくり会が行われました。今までは植樹が森づくりのお仕事でしたが、今年は植えた木の日当たりを確保する除草がメインの作業。植樹したまだ小さい木の苗よりも高く育つオオイトドリやアワダチソウ、オギなどの草を、苗の周辺から抜くのですが、深く大きく根を張ったこれらの植物たちの抜き応えは抜群です。短い時間ですがみんな一生懸命働きました。

## 後半はそれぞれが森を楽しむ時間に

午後からは室内で森のクラフトと引き続きの「Fの森」で森の様子を観察するガイドウォークです。道民の森の森林学習館の職員さんに指導してもらいながら、子どもたちはそれぞれ個性的な作品を作ってお持ち帰りしました。また、「Fの森」を歩いた人たちは植樹から10年以上を過ぎた森の様子について熱心に見回っていました。

2013年から森づくりがはじまった「Fの森」も12年が過ぎましたが、場所によってはまだまだケアが必要です。森づくりは100年の仕事、これからも森づくりは続きます。



Report

## あすもり実地研修会 コープさっぽろ本部で 苗 立 て

コープさっぽろ本部の玄関に森づくりが出張です。大量の土と「Fの森」で採取したタネを発芽させた樹の苗をポットに移す苗立ての作業を、コープさっぽろの職員研修としてあすもりが行いました。

1回の作業は20分、これを5回実施し、延べ96名の職員さんが参加してくれました。作業そのものは短い時間ですが、多くの職員さんが訪れ、楽しそうに土に触り、物珍しそうに木の赤ちゃんを手にとってはポットに植え付けました。普段は森づくりに携わらない職員のみなさんですが、コープさっぽろが森づくりを行っていることや「Fの森」について知ってもらえる機会をつくることも大切だと感じました。何より、土いじりをしている参加した職員さんの楽しそうな姿は印象的で、実際に森に行ってみたいという声も聞かれました。これをきっかけに森づくりに関心を持ってもらい、「Fの森」まで足を運んでもらえるとうれしいですね。



Report

## コープ未来の森づくり基金 2024年度 活動報告・会計報告

今年度は道内8か所で571名の組合員さんと2,800本を植樹いたしました。また、森づくり団体との交流植樹会が5回実施され、37名の組合員さんが参加しました。2024年度の植樹会への組合員参加は計571名、総植樹数は4,902本になります。

コープさっぽろ「あすもりフォーラム2024」には森づくり団体や環境団体などから83名の参加があり、事例報告として、釧路地区組合員活動委員会の市民の森づくり活動への参画に関する取り組み報告がありました。今後とも「あすもり」は市民・組合員が参加する森づくりのあり方について学び、考える場づくりを継続して行ってまいります。

森づくり団体への助成として、高額助

成3団体、小 額 助 成20団体 に対し441.4万円を支援しました。また北海道漁業協同組合連合会（ぎょれん）が進める「お魚殖やす植樹活動」に対し、249.8万円を助成しました。

「第15回森づくり団体助成贈呈式」は、札幌会場のほか、道内6会場で同時開催されました。高額助成を受けた「一般財団法人北海道札幌南高等学校林・「あさひかわサケの会」・「恵庭ふるさと100年の森」から、発表いただいた事例につきましてはオンラインでも発信させていただきました。

基金レポート「モリイク」は27・28号を発行し、交流サイト「あすもりFacebook」も「いいね!」が1,537件（3月20日現在）と推移しています。✳

## 2024年度収支一覧

（単位：千円）

|           | 24年度予算 | 24年度決算 | 内容                  |
|-----------|--------|--------|---------------------|
| レジ袋積立     | 21,600 | 21,506 | レジ袋削減の協力積立金         |
| 協賛金 ほか    | 1,000  | 938    | コープ未来の森づくり協賛金       |
| 収入計       | 22,600 | 22,444 |                     |
| 植樹森づくり活動  | 11,600 | 14,825 | 植樹・育樹活動、団体交流、ぎょれん植樹 |
| 助成金支援     | 4,500  | 4,414  | 森づくり団体への助成          |
| 広報・調査・運営費 | 5,900  | 3,009  | 広報誌、調査研究、その他広報費     |
| 支出計       | 22,000 | 22,248 |                     |

Present

## アンケート&プレゼント

「モリイクvol.30」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1** モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。  
**Q2** 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？  
 右からそれぞれお選び下さい。

フォトストーリー「森は」(P2) 巻頭コラム (P9) 森あそび研究所 (P10,11) Fの森 新しい風景 (P12~17) 木育エッセイ (P18) 大きな木の小さな物語 (P19) ほっかいどう 森のイキモノSOS (P20,21) あすもりレポート (P22,23)

- Q3** 森づくりの活動に参加したことがありますか？(はい・いいえ)  
**Q4** コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。  
**Q5** 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

## 応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・連絡先を明記の上、メールにてお送り下さい。右の二次元コードより、アンケートフォームからもご回答いただけます。

応募締切 12/1(月)

## コープさっぽろ環境推進グループ

〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号

メール: csapmori@sapporo.coop

※あすもりやモリイクについてのお問合せは右の「お問合せフォーム」二次元コードからどうぞ



## PRESENT!



アンケートにご回答いただいた方から抽選で2名様に、アイヌ模様が美しい木の糸巻きをプレゼントします。コースターとしても使えるんですって。どちらの柄が届くかは楽しみに。

※プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます